

私の一冊

こども学科 川島 貴美江 先生

湯本 香樹実 著 『夏の庭 The friends』

小鹿図書館 918.6/Y97

風にコスモスの花が揺れる頃、私は必ずこの本を思い出して手に取っている。私の一冊としては、40年以上愛読してきた小説、住井すゑの『夜明け朝あけ』のほうがダントツの存在で、もう何回も読んでいたのでぼろぼろになってしまっているほどである。どちらにしようかとあまりに悩んだ末、この『夏の庭』をとりあげた。『夏の庭』は、「死とは何か」という問い(恐怖)に、はまってしまった少年たちが、町はずれに一人で暮らしているおじいさんを見張り、その死の瞬間を発見しようとする物語である。この物語を何年も何回も読み続けていて、今回取り上げたのは、いつしか自分が登場するおじいさんの近くに来ていると感じ始めたからである。物語は3人の少年の小学校6年生の夏の出来事が描かれている。そのうちの一人(山下君)がいなかのおばあさんの葬式に出席した後、初めて死んだ人を見て、2人(僕と川辺君)に伝える。3人は、「死ぬってどういうこと、いつか死ぬって分かっているけど全然信じられない」ということになる。3人は夜が怖くて、一人でトイレに行けなくなる。

3人は古い小屋のような家に住む無気力なおじいさんの観察を始める。いつ死ぬか見張るのである。子どもたちの好奇心は深まり、ある日ふとしたきっかけで3人とおじいさんとの交流が始まってから、日々交流は深まり、何故かおじいさんが元気になっていく。子どもたちもおじいさんからいろいろなことを教わりおじいさんに魅かれていくのである。そしてやがて「死とは何か」という問いかけにおじいさんから答えが出される。

3人の子どもたちはそれぞれおじいさんの答えを子どもなりに受け止め、おじいさんの暮らした庭のコスモスの花を眺めるのである。そしてその後別々の人生を歩いていく。

湯本氏の体験に基づくおばあさんの死を小説にしたこの『夏の庭』は、映画化、舞台化もされている他、世界 10 か国で翻訳されている。家族や子どもたちだけでも読める。高齢者になっても読むことができる。

私の一冊のこの本もまた、私の手の中でぼろぼろになりかけている。毎年コスモスの花を見て、年を重ねるようになった自分が、幾人かの人と別れてきたことを知る。そして多くの人の死と思い出が私の中で生き続けて「生きるとは」という問いになっている。

